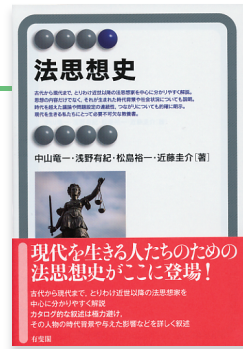


法思想史

中山竜一 = 浅野有紀 = 松島裕一 = 近藤圭介

2019年12月発売 / 346頁 / 本体2300円+税
四六判 / 並製



編集
担当者
から

高校時代の「倫理」等の授業で習った思想家を含め、たくさんの人物が出てきます。「あ、また暗記ものか」とウンザリされるかも知れません。しかし、この本は違います。1つ1つの章がまるで小説のように豊かに展開していきます。当時の法思想家達が、そのとき何を思い、どうして、そういう考え方や理論を世に出していったのかがよく分かります。さらに、彼（彼女）らの時代背景や社会状況についても可能な限り説明されています。本書を読めば、当時の考え方が今を生きる私たちにどう影響しているのかを知ることができます。

法思想家達が生きた当時の議論や問題設定は、時代を超え、連続性をもって今の世に受け継がれています。本書ではそのつながりが分かるように様々な工夫がされています。この本は、現代を生きる上で必要不可欠となっている「グローバル・ヒストリー」を知る上で、非常に有益です。

本書の巻末には読書案内と膨大な引用・参考文献が掲載されています。これだけでも資料的価値は非常に高いでしょう。読んでみて決して損はない「今を生きる人たちのための」一冊です。(1)

Point!

P

本文中のゴシック体は重要語句の強調、丸ゴシック体は原典からの引用を示しています。

界中で読み継がれている。

人格そのものに批判する無礼な不法、権利を偏狭し人格を侮辱するようなしかたでの権利侵害に対して抵抗することは、義務である。それは、まず、権利者の自分自身に対する義務である。――それは自己を倫理的存在として保存せよという命令に従うことにほかならないから。それは、また、国家共同体に対する義務である。――それは法〔正義〕が実現されるために必要なから。(権利のための闘争)

ちなみに、イエーリングの葬儀には1歳年長のヴィントシャイトがライプツヒヒから駆けつけ、彼もまたそのわずか6週間後に75年の生涯を閉じた――この出来事は、終生にわたる彼らの友情を物語るエピソードとして今に伝えられる。

転向後のイエーリングは概念法学を手厳しく批判したものの、他方で、パンアクトン法学が重視した法的構成そのものを放棄することはなかった。また近年の研究では、ヴィントシャイトを現実から乖離した概念法学者の典型とみなす従来の一般的理解にも反省が迫られている。こうした事実を踏まえれば、2人の交友が示すように、彼らの法学観は傍から見るよりも案外近いところにあったのかもしれない。

III 自由法運動から利益法学へ

エルリッヒの経歴

自由法運動とは、19世紀末から20世紀初頭にかけて法律学の刷新運動である。この運動に属した人びとは必ずしも一枚岩ではなかったが、イエーリングの概念法学批判を継承しつつ、裁判官の法創造を承認した点でおおむね共通している。ヘルマン・カントロヴィッツ (1877-1940)

と並び、この運動の主導者のひとりに数えられるのがオイゲン・エールリッヒ (1862-1922) である。

オーストリア＝ハンガリー帝国領プロヴナの都市チェルノヴィツ (現ウクライナ) でユダヤ系弁護士家庭に生まれたエールリッヒは、帝国内の名門ウィーン大学で法学を修めたのち、郷里のチェルノヴィツ大学で教鞭をとった。彼はドイツ法学の辺境の地において「法社会学の基礎理論」(1913年)を執筆し、後述のウェーバー (第9章)とともに法社会学の開拓者としてその名を残している。同書の序文には、「法発展の動因は、あらゆる時代におけると同様に現代でも、立法や法学や理論ではなく、社会そのものの中にある」という一文が見られる。この宣言のとおり、エールリッヒは社会一般の人びとに受容され、遵守されている法に関心を抱き続けたのである。

フランス註釈学派と科学学派

そのエールリッヒが「法社会学の基礎理論」に至る途上で行った講演が「自由な法発見と自由法学」(1903年)である。自由法論的な考え方が鮮明に打ち出されたこの講演では、フランスの法学者フランソワ・ジュエ (1861-1959) が好意的に参照されている。ドイツの自由法運動と相前後して、フランスにおいても伝統的な法理学に対する批判が巻き起こっており、その批判の急先鋒に立ったのがジェニーとレイモン・サレユ (1855-1912) であった。彼らの学風はこゝに科学学派の名称で知られる。

そもそも19世紀のフランスでは、1804年に成立した民法典を前提にして、これに詳細な註釈を施すことが私法学の主流であった。この作業に従事した一連の法学者たちを総称して註釈学派と言う(第2章)で登場した中世の註釈学派とは別ものである。註釈学派の信念によれば、民法典にはありとあらゆる事案に対する規範が網羅さ

※目次は、小社ウェブサイトの本書のページをご覧ください。

